



見慣れた橋がポッキリと

作家・ドイツ在住 川口マーン恵美

思い入れの深い町

久しぶりにドレスデンへ行った。初めて訪れたのは20年以上も前だが、まさに一目ぼれで、その後、何度も通っては、2005年、『ドレスデン逍遙』を上梓した。つまり、私にとっては思い入れの深い町だ。

ドレスデンは旧東独に位置し、ザクセン州の州都。ザクセンはドイツ最東の州で、ドレスデンからチェコ国境まで30キロメートル、ポーランドも直線距離なら100キロもない。つまり、冷戦時代は自由世界の行き止まりで、西独に住む人々の視野にはほとんど入っていなかった。

統一後にかなりの時間をかけて、歴史的建造物の修復がなされたが、この地の1番の有名人は、1670年生まれのアウグスト強王だ。ザクセンの選帝侯であり、ポーランド・リトアニア共和国の国王でもあった彼は、18世紀前半に絶対君主として権勢を誇った。ただ実際には、戦も政治も大してうまくない王様だった。

その彼がなぜ有名人であるかという点、小山



アウグスト強王の騎馬像

のような体躯と、華やかなプレイボーイ歴のせいだけではない。持ち前のセンスで、エルベ川のほとりに、大胆さと繊細さを絶妙に融合させた絢爛豪華な建築物を造り、また、激しい情熱で世界中から最高峰の絵画、高価な

宝飾品や工芸品を収集し、現在に至るまで私たちの目を楽しませてくれるからだ。

ツヴィンガーと呼ばれる建物の中の博物館には、腰の高さほどもある豪華な伊万里焼の壺がずらりと並ぶ。そういえば、ヨーロッパで最初の磁器製造に成功したのも、アウグスト王が実験室を与えて励ませた若い薬剤師だった。

ちなみに、この若者は半分パテント師だったのか、錬金術ができると吹聴したため、アウグスト王に招聘(監禁?)されたのだが、金は作れず、呻吟するうちに、偶然にも、当時、ヨーロッパ人がどうしても作れなかった磁器の製造に成功。つまり、今に残るマイセン焼もアウグスト王の業績と言える。当時の民衆が、アウグスト強王のおかげで幸せだったかどうかは知る由もないが、ドレスデンはエルベ川のフィレンツェと呼ばれるヨーロッパでも屈指の美しい都市の1つとなった。そして、そこでは、様々な芸術家や商人や手工業者が生き生きと活動していただろうことは間違いない。

インフラの老朽化が進んで

ドレスデンへは、現在、私の住むライプツィヒから車で2時間弱。去る9月1日、日本からのお客さんと共に、久しぶりに壮麗な町を見物したが、まだその感動も冷めやらぬ11日の朝、ニュースを見て驚愕。町の真ん中に架かっている、あの見慣れたカロラ橋がポッキリ折れて、エルベ川に落ちていた! いったい何が起こったのか?

この橋は、自動車の通行する部分と、市電、歩行者、自転車の通行する部分に分かれている